

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500306

研究課題名(和文) 中井正一と『美・批評』『世界文化』『土曜日』- 定量的、定性的手法による研究

研究課題名(英文) Masakazu Nakai and Bi-Hihyo (Beauty and Critique), Sekai Bunka (World Culture), and Doyobi (Saturday) : Quantitative and qualitative research

研究代表者

後藤 嘉宏 (GOTO, YOSHIHIRO)

筑波大学・図書館情報メディア系・教授

研究者番号：50272208

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：中井正一は、1930-37年に同人誌『美・批評』と『世界文化』、新聞『土曜日』を主宰したとされる。本研究はこれらの媒体の共通性と異質性を、記事内容の分析を通じて捉えた。『世界文化』と『土曜日』はほぼ時期の重なる媒体であるが、後者に中井は肩入れする。マルクス主義者が多く欧米の紹介記事も多い『世界文化』に比して、『土曜日』はより中道的で中国関連の記事も多い。また『美・批評』の後継誌が『世界文化』であるものの、主題、広告について『美・批評』は『土曜日』に似た側面もある。『世界文化』に一見、距離をおく中井であるが、彼の代表作「委員会の論理」は同誌に載せたが、本研究はそのことの意味を探った。

研究成果の概要(英文)：From 1930 to 1937, Masakazu Nakai presided over the publication of Doujinshi (coterie magazine) Bi-Hihyo; (Beauty and Critique), Sekai Bunka (World Culture), and tabloid Doyoubi (Saturday). This research aims to show a communality and individuality of these publication by a content analysis. Although Sekai Bunka and Doyoubi are published during the same period, Nakai gives his support to the latter. Sekai Bunka frequently publishes Marxian articles and introduces situations in Europe and America. In comparison to Sekai Bunka, Doyoubi takes a mean position and publishes more articles relate to China. On the other hand, Sekai Bunka is a successor to Bi-Hihyo, yet in its theme and advertisement, Bi-Hihyo bears a close resemblance to Doyoubi. Even though Nakai seems to keep distance to Sekai Bunka, his representative work "Logic of Committees" (1936) is published on Sekai Bunka. This research tries to inquire its reason.

研究分野：社会情報学、コミュニケーション思想史

キーワード：中井正一 『土曜日』 『世界文化』 『美・批評』 新村猛

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究課題の歴史的背景

国立国会図書館初代副館長中井正一(1900-1952)は、京都大学美学美術史専修出身で、大学院在学中に亡くなった恩師深田康算の全集が岩波書店から発刊されるに際し、その編集の事実上の中心となった。そのとき中井と一緒に集まった仲間たちを中心に、映画を含めた美学・芸術についての雑誌として、1930年同人誌『美・批評』を発刊した。『美・批評』を刊行しているさなかの33年4月、京大瀧川事件が起こり、中井は文学部大学院生として、文学部のなかでの瀧川教授擁護運動の中心的存在となり、『美・批評』は一時休刊した。翌年、『美・批評』は復刊したが、復刊前のメンバーに加え、復刊後は、中井が運動を通じて知り合った仲間が加わり、哲学や考古学、物理学、文学等多様な専門の者が加わった。さらに『美・批評』は35年『世界文化』と改題し、より人民戦線的なものへと変わった。他方『世界文化』の刊行と併行して、中井は松竹の大部屋俳優齋藤雷太郎の『京都スタジオ通信』の権利を買い取って、同志社大学をやめた弁護士林要、能勢克男らと齋藤も含めて4名で1936年『土曜日』という隔週刊新聞を刊行した。だが37年11月、『世界文化』『土曜日』関係者の一斉逮捕によって、双方共に終刊した。

(2) 主要先行研究と本研究の課題の趣旨

ここではまず重要な先行研究として荒瀬豊と平林一のものが挙げられる。『美・批評』『世界文化』『土曜日』はいずれも中井正一が主宰した媒体であるとされるが、荒瀬豊は京都大学の大学院生や出身者を中心とした『世界文化』と、喫茶店に置かれ、学生、労働者に廻し読みされることを想定し、さらに読者による投稿を主体として構成されることを目指した『土曜日』とでは、執筆者の人脈も読者層もまったく異質であろうと述べている(鶴見俊輔ほか『抵抗と持続』1978、所収)。平林一は、『美・批評』(第一次)は自由主義的モダニストの雑誌であったのに対して、『美・批評』(第二次)にはマルクス主義者が多く加わり、自由主義者とマルクス主義者の合従連衡的な媒体となっていたと述べ(平林一『美・批評』の人々 『世界文化』研究(一)、『キリスト教社会問題研究』9、1965)、さらに久野収はマルクス主義者の真下信一と中井とで主導権争いがあったように記している(久野『読書のなかの思想』1976)。また『美・批評』をタイトルに掲げた論文は平林の他に山田宗睦「『美・批評』「世界文化」-日本の思想雑誌」(『思想』470、1963)、吉田正純「生活に対する勇気(前編)-一五年戦争初期・京都の消費生活運動と雑誌『美・批評』集団における「学習」の位置」(『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』2、2003)しかないが、山田は全目次を列挙しているものの掲載論文の中身への言及はないし、吉田も山田のその作業を引く

が、あとは「美・批評集団」の社会運動への考え方の分析が中心で、掲載記事そのものの分析は、前掲平林が若干行う以外はない。『世界文化』『土曜日』に出ている復刻版が『美・批評』ではなく、現物の所蔵館も僅かしかないこともその理由として考えられる。

したがって、このような平林や荒瀬のいう傾向の違いを、より記事の内容に即して確かめつつ、同人遺族へのインタビューも踏まえ、分析することをめざしたのが、本研究である。

2. 研究の目的

研究代表者後藤は博士論文並びにそれを改稿した『中井正一のメディア論』(2005)以来、中井のメディアム、ミッテル二つの概念に焦点を当てて、研究している。

これは稲葉三千男(稲葉『マスコミの総合理論』1987所収)が中井はメディアムからミッテルへと述べていたと主張するのに対して、杉山光信(杉山『戦後啓蒙と社会科学の思想-思想とその装置1』1983所収)が中井はそうではなく、メディアムから『メディアムに支えられたミッテル』を、と唱えていたと述べ、この二名の議論に呼応したものである。ここでいうメディアム、ミッテルを一言で説明するのは難しいが、弁証法の媒介を意味し、弁証法は元来ソクラテスの対話の論理に由来する。媒介すること、やりとり、コミュニケーションすることという動的な媒介がミッテル、それに対して媒体、媒介物として固定的な状態、静的なものがメディアムである。具体的には、難しい理論やその理論を載せた媒体である書物はメディアムである。他方会話は空気という媒体を経るが、媒体という物の存在を意識させず、言葉や言葉に載せられた思想そのものが動く印象を与えるのでミッテルである。またそういった理論や書物の担い手である知識人とその理論の受け取り手である大衆とが分離したままであれば、固定的な状態であるので、それはメディアムの媒介であるといえる。「分離したまま」とは、相互に意思疎通なく、離ればなれの場合はもちろんそうであるが、たとえコミュニケーションがあっても一方向的に知識人が上から目線で大衆に理論を授ける場合は、メディアムである。一方、分離したままではなく、相互に動きがあり、交わる状態がミッテルである。知識人と大衆とが対等な立場で相互にやりとりし、送り手と受け手のように相互に役割互換ができ、弁証法が対話の論理であるように、そこに対話が成立すれば、それはミッテルである。要は一方向性をメディアム、双方向性をミッテルということも可能であるが、同じ双方向性であれば、本来異質な者相互の対等性の方が本来同質な者相互の対等性よりも、ミッテルの要素は強い、少なくともミッテルの意味合いは大きい。

今回の研究課題に即してこのメディアム、ミッテル問題を述べると、『美・批評』よりもその後継誌の『世界文化』の方が、異質な

領域の知識人相互のやりとりを実現するので、相対的にはミッテル的媒介がなされるといえる。しかし、重なった時期にも出されていた『世界文化』と『土曜日』とを比較すると、『世界文化』では知識人が閉ざされたコミュニケーションをするのに対して、『土曜日』は読者の投稿を重視するし、また編集も小学校卒の大部屋俳優藤と中井、林、能勢という帝国大学卒の者とが一緒に担う。その意味で知識人と大衆とが対等にコミュニケーションを行っており、前者に較べ後の方がミッテル的媒介がなされる。

したがって、中井正一が『世界文化』よりも『土曜日』に向かったとすれば、単純に考えれば、メディアムからミッテルの媒介へと向かったと、一応、解することができるが、その点も精査を要する。また中井の弁証法のなかにはシュパンソングの弁証法もあり、その点も検討を要する。

このメディアム、ミッテル問題をより深くより立体的に、具体的な実相に即して、理解するのが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

各媒体の記事及び論文を定性的並びに定量的に分析した。また同人の遺族にインタビュー調査した。ただし当初、定量分析をOCR読み込みによって自動的に行うことを計画したが、旧字体旧仮名遣いであることに加え、『土曜日』に及んでは行によって内容上の理由なく行送りされるとフォントの大きさも変わったりするので、自動的な読み込み集計作業は諦め、アルバイターが実際にテキストを読んで該当する項目に振り分けていく手作業で分析した。遺族へのインタビューは、『世界文化』同人たちの生活様式、口癖、子息への教育方針など、日常生活について聞いた。文章・テキストから分かる同人の思想の背景部分を理解し、同人の思想への解釈上の矛盾点や論点を整合的に理解するための情報をそこで得て、解釈の揺れを制御する重要な目安に使った。

4. 研究成果

(1)量的には『世界文化』より『土曜日』が優位

中井正一が『世界文化』よりも『土曜日』に向かったか否かといえは、記事・論文の量的にはその方向に向かったといえる。このことは分析せずとも『世界文化』の目次情報に出ている中井あるいは彼の筆名の記事数が、中井のものとして全集に所収された『土曜日』「巻頭言」の数より少ないことから、明らかである。しかしさらに『土曜日』で無署名の記事も読み込むと、明らかに中井のもの分かるものも多くあり、一層上記命題が成立することが判明した。

(2)量の違いへの評価の難しさ

しかし短い評論は除いて『世界文化』に載った唯一の中井の論文が、中井の戦前の最も

代表的な論文である「委員会の論理」であるので、『世界文化』から『土曜日』へと中井の軸足が移動したと、単純に結論づけることはできない。特に三つに分けて連載され、しかも彼のそれまでの既出の諸論文の骨格部分がニュアンスを換えてこの論文に登場することが多いため、満を持して「委員会の論理」を載せたとの見方も成立する。このいずれであるかの検証は、メディアムからミッテルなのか否かという、2. で挙げた稲葉と杉山の対立点とも関係する。

(3)二年次までの成果

成果の概要

定性的に内容を分析した限りでの『世界文化』と『土曜日』の相違点と共通点を、研究代表者は講座『東アジアの知識人』第4巻にて二年次の終わりに、発表した。

そこでは特に編集後記に着目しつつ分析した。概要は以下の通りである。『世界文化』は最後の時期に中国映画や中国音楽についての論文はあるものの基本的に欧米一辺倒であり、『土曜日』は中国に注目する。さらに遠くの西欧の瑣事に関心が向き、近くのアジアの重大事に関心の向かない、日本の知識人への批判を表明する。穿った見方をするならば『世界文化』を暗に批判する趣さえある。また『世界文化』同人はマルクス主義者と自由主義者とが混じり合っていたとされるが、『土曜日』は社会大衆党寄りのスタンスをとる。社会大衆党への批判を書く場合はあるものの、基本的に同党の政策は評価する。また『土曜日』1937年6月20日号の編集後記は齋藤の署名入りで、『土曜日』が『世界文化』の別動部隊ではないことが明言される。

他方『土曜日』『世界文化』両媒体の共通性として、ヘレン・ケラーなど眼や耳などの感覚器官の不自由な人の際立った能力への着目と、その延長上にある共通感覚への志向が指摘できる。中村雄二郎『共通感覚論』(1979)で、中井や三木清や戸坂潤や三枝博音の共通感覚・常識への注目が、西田幾多郎の哲学を発展的に乗り越える可能性を示唆しているが、これはその文脈で捉えうる事案である(4)参照)。また『土曜日』では無署名の記事ではあるが、ソ連の社会関係を、ミッテルの媒介(その用語は用いないが)に関連づける。スターリンによる軍司令官への肅正に対してさえそういうミッテルの典型として肯定的な眼差しで捉える。つまり『土曜日』は『世界文化』に比して、社会大衆党寄りであって、相対的には左傾化していないが、ミッテルの媒介との関連性が認められると、『世界文化』同様に親スターリンで左傾化していることが分かった。また久野収は『中井正一全集第1巻』「解説」(1981)にてすでに、中井が「委員会の論理」について「五カ年計画の民主制を支える「人民委員会の論理」なのだ」と述べていたと証言している。一方中井は「ずっと一貫して唯物論にはじつに執拗に抵抗した」(新村ほか『世界文化』

のころ』『世界文化復刻(三)』1975)という真下の発言の方に重きを置く研究代表者はこれを誇張と考えていたが、無署名とはいえ中井のもとと推測されるこの記事は久野の発言の妥当性を裏づける。

評価の問題

この親ソ的な記述から、中井正一が『世界文化』よりも『土曜日』に向かったか否かは記事量の多寡だけでは確定できず、『世界文化』に満を持して「委員会の論理」を載せようとしていたのだという見方が、この面では一定の妥当性を有するといえる。

しかし『世界文化』14号編集後記にて、紙幅の都合で「委員会の論理」の原稿を圧縮して貰った点、及び前号の「委員会の論理」(上)で誤植の多かった点も詫げられる。あるいは別の号(3号、7号)の編集後記で予告された中井の論文が実際には掲載されないケースもあり(8号後記で詫げる)中井が編集の実権は握っていなかった可能性もある。

この限りではやはり中井は真下と主導権争いをしてきた『世界文化』よりも『土曜日』に親しみを感じていた可能性も考えられる。

中間的報告の結論

この講座『東アジアの知識人』第4巻において後藤は、この中井の両面性、つまりミッテルの媒体にふさわしい『土曜日』志向をもちつつ、代表作である「委員会の論理」を『世界文化』というよりメデイウムの側面のある媒体に載せることを、中井が究極的には「メデイウムに支えられたミッテル」を志向していたことの証として、結論づけた。

(4)三年次での研究成果

同人の日常生活についての文献調査とインタビューの概要

三年次は同人の遺族の聴き取りや新村猛追悼集刊行委員会『緑の樹』(1995)馬場俊明『中井正一伝説』(2009)等、同人の生活エピソードを伝える関連文献の渉猟や再読を通じて、新村の無信仰、中井の信仰心を確認し、にもかかわらず両人が固い友情で結ばれていて、さらに新村は終生、人民戦線時と同様、共産党と社会党との革新共同を研究者、運動家として貫き通したことを確認した。特に中井には『土曜日』刊行時ならびに尾道での文化運動時に協力した住谷悦治(のち同志社大総長)と、失職時、帝国学士院の助成を貰う際並びに国立国会図書館副館長に就職する際推薦して貰った新村出(京都大学図書館長)という二人の後ろ盾がいたが、新村猛が出の次男であるだけでなく、住谷とも深い繋がりのあることも確認できた。

考察・評価

これは社会大衆党的な『土曜日』により親しみを感じ、マルクス主義の唯物論の宗教否定に距離を感じる部分もある中井と、マルクス主義的な論文も多い『世界文化』にも親しみを感ずる新村(新村は『土曜日』にも協力的であるが)とが結合することに意味があるといえる。その戦前の現れが、中井が満を持

して代表作となる「委員会の論理」を『世界文化』に書くことであり、またその戦後の現れが、社会党系と共産党系が鋭く対立する運動にもあえて主導的立場でかわり、新村が困難な状況のなか両党の連帯を主張し続けたことであると、評しうる。特にこの1930年代、平和と平等を願うマルクス主義者と平等の実現のためには軍とも連携しようとする社会大衆党との共同は極めて難しかったと坂野潤治(『昭和史の決定的瞬間』2004)が指摘する世間の状況のなか、自由主義者からマルクス主義者までの共闘を貫いたのは、単に折衷としての中間の位置に静坐するのではなく、異質な二極が常に引っ張り合うシュパンヌングの弁証法のダイナミズムを表現していたのだと評しうる。このことによって(3)の成果((3))でやや曖昧にされていた問題の解決の方向性が得られた。

定量的な分析

また三年次には遅れ気味であった定量分析を進めて、(3)で述べた講座『東アジアの知識人』第4巻で示した、定性分析でみた諸傾向を再確認した。ただし『世界文化』の「世界文化情報」欄においてほとんど中国関連の記事がないことは確認できたが、例外として1935年5月号で「中国史学会の動向」、37年3月号で「第3回中国哲学会」が載っていた。さらに同誌の広告においては1935年10月から36年7月まで『唯物論研究』の広告が毎号載り、それ以降この雑誌の広告は消え、他方、36年10月から37年1月までと37年6月号には『土曜日』の広告が載っていることを確認した。これは真下と中井の主導権争いに照らして示唆的である。というのも『世界文化』同人のうち真下は『唯物論研究』の同人でもあり、『世界文化』同人のうち中井は『土曜日』の巻頭言の過半を執筆している人物であるからである。また『土曜日』掲載の広告は486点中、音楽喫茶121点、その他の喫茶店224件で、喫茶店で読まれたことが広告からも如実に表れた。また欠損の3号以外の全28号で30点、化粧品の広告があった。紙面上で女性の投稿を促していたが、実際に一定数の女性読者がいることが広告主側からも推測されていたといえる。また記事に映画関連のものが多し34号などタイアップ特集もあるが、映画ないしは映画館の広告は14に留まる(ただし段数は多い)。また書店・古書店が3点、書籍が2点ある。雑誌の広告が6点であるが、すべて『世界文化』の広告である。他方『世界文化』に載った広告では書籍のものが多し(詳細は参照)。

『美・批評』の分析

メデイウムとミッテル問題に研究代表者後藤の関心が強くあるため、『世界文化』と『土曜日』というほぼ同時期に刊行されていた、中井のかかわる媒体に、二年次までは焦点を絞っていたが、三年次には『美・批評』の分析も定性的に行った。

『美・批評』は1.「背景」で述べたよう

に、タイトルのみ紹介した論文はあるが、自身の記事・論文に及んだ研究は前掲平林のみで、それもごく一部の記事に留まる。それはほぼ揃っている図書館がごく僅かであるということもある。今回『美・批評』を(一部欠号があるばかりか前半は表紙と背表紙を欠く)網羅的に複写し、定性的に分析した。

『美・批評』の後継誌が『世界文化』であるが、少なくとも瀧川事件での中断前の『美・批評』は、『世界文化』よりも『土曜日』に近い面があることが分かった。例えば『美・批評』広告において、フルーツパーラー八百常という店が何度か出てくるが、これは『土曜日』広告の常連であり、他方『世界文化』には出て来ない。食べ物や喫茶店の類が比較的多い。他方『世界文化』では酒の広告か飲み屋の広告か判然としないものはあるものの、創刊号にブラジル喫茶サンパウロがあるほかは、喫茶店の広告はなく、基本的に本、雑誌、書店(販売)の広告以外、ビールの広告が毎号ほぼ1本入るパターンである。『世界文化』の終わりの時期、1937年の6月号以降映画館の広告が1本ずつ載るが、基本的には出版と販売併せた広い意味での書店関係の広告で占められている。また『美・批評』ではサロン・エランヴィタール、サロン・ド・コマドリなどサロンと称する社交場の広告もある。例えば瀧川事件発端時の1933年5月の27号の奥付の裏には、レコード屋、パン屋の広告もあり、日常生活に密着した感じを与える。瀧川事件復刊後もブラジル喫茶サンパウロの広告があるが、基本的に書店のものが多く、広告も減っている。また『美・批評』には中国関連専門の書店の広告も載っていることも注目に値する。

瀧川事件前は基本的に目次をみても分かるように日本志向の論文も多く、国文学の美学的考察や中井の「日本的なるもの」(12号)(全集未採録)長廣敏雄の「日本の音楽」(15号)など、日本をタイトルにしたものも多い。例えば中井の「日本的なるもの」では「新しき欧羅巴の意味するものと、所謂日本的なるものが一致するのではないかと云ふ考へは、彼地の批評家が漸く今や抱きはじめての関心であるノそは今又世界的関心でもなくてはならない、このエンジンの爆音の中に何うして日本伝統の清明なるものを味ひ得るか。問題はこの点にかゝつてゐる」と記され、近代の否定の有無の違いは措いても、のちに京都学派四天王らが「世界史の哲学」座談会で展開する論点を先取りする発言も見受けられる。また長廣「日本の音楽」では「日本に於ける伝統主義と近代主潮との混化ほど魅力ある題目はないのだ」とも記される。以上からも、日本主義の国際化ないしはそもそも日本主義に潜在する国際性という問題意識が強く現れている。また『世界文化』同様、初期から外国物の記事は多いが、初期においては外国の翻訳ものは基本的に小さなフォントの二段組で構成され、大きなフォントで

の一段組はオリジナルの記事である。その点も『世界文化』とは違う。これらの点からも竹田篤司『物語「京都学派」』(2012)文庫版解説で佐藤卓己というところのSelbstdenken(自分で考える)の伝統をこの時点では、同人たちが重視していたことが窺える。

瀧川事件後の『美・批評』にはマルクス主義者である真下信一や新村猛は加わっているものの、これらのメンバーの著述も含めて、マルクス主義の美学や、芸術作品のマルクス主義的分析の論放が多く、基本的に美学雑誌の位置づけを守ろうとする。特に1934年10月の32号にて真下信一が秋田徹の筆名で「レアリズムの論理」を書いているが、その「後記」で、「急いでまとめたのと、芸術的素養のたりないためとで、或は根本的誤謬を犯してゐるかも知れない」と記すが、この言葉からも『美・批評』が瀧川事件後も美学雑誌の基本は崩さなかった点がうかがわれる。

なお、1934年5月の28号に「美・批評 編集部」の名義で「技術と芸術の問題のために」という文章が載っている。この文章は「自らの合理(ラチオ)」「見透さるる」「進歩の方向の線に副ひて」等、中井の癖のある言い回しが頻出し、少なくとも叩き台は中井の手になるものといえる。ここでは文献資料として「哲学的資料」の項目の前の方に戸坂や岡邦雄など唯物論研究会のメンバーのものが挙げられる。久野は自分も中井も反ファシズムの運動のなかでマルクスを勉強しはじめたと語っているが、そのことを裏づける。また中井が「美・批評 編集部」名で書くことから彼の主導性が『世界文化』よりあったといえる。なお同じ号には発表会の記録が記され同じ題目で中井が発表している。

結局『美・批評』は瀧川事件前の傾向としては、日本主義の国際化ないしは国際化の観点も強く、広告などに『世界文化』よりは『土曜日』との近接性がある。瀧川事件後はそもそも広告はへるが、喫茶店の広告は続き、『世界文化』の広告とは少し違う。マルクス主義の同人が加わるが、美学や芸術批評の論文が主流で、基本的に美学の雑誌という枠を逸脱しない。一方中井もマルクス主義の美学への適応に関心を示す。

研究成果の総括と意義、展望

雑誌『美・批評』の後継紙が『世界文化』であり、『世界文化』と重なる時期に中井の関わったもう一つの媒体が隔週刊新聞『土曜日』であるが、雑誌か新聞かという大きな枠の違いが中身を規定する部分が多い点を割り引いて考えると、『美・批評』は広告の傾向、記事の傾向、中井の執筆、中井の主導性いずれも『土曜日』と『世界文化』の中間に位置づけられ、特に瀧川事件前は『土曜日』に近い面が際立つ。

このことは1.で示した荒瀬(1978)の『土曜日』と『世界文化』の違いの指摘の妥当性を、強く裏付けるものである。そしてそのことは、より抽象的には「メディウムからミッ

テルへ」を中井は唱えたとする稲葉の説の妥当性も支持する。

しかし『美・批評』『土曜日』で中井のものと推定可能な無署名の記事で、マルクス主義美学を志向しスターリンを擁護する文章がみられることは、中井が満を持して代表作「委員会の論理」を『世界文化』に載せたことの意味も問いかけてくる。つまり『美・批評』が美学畑の雑誌からマルクス主義者の加わった雑誌となってもそこに活動の拠点を中井は置きつつ、このいわば第二次『美・批評』がさらに『世界文化』となるに及んで、より中道的な『土曜日』の方にむしろ新たな可能性を見出し、そちらに彼は居心地の良さを感じていた、しかしそうでありつつ自らを両極に引き裂くかのような緊張(シュパンヌング)感をもってマルクス主義の方にも関心を深め、そのようななか中井なりにマルクス主義者の同人も意識した著作として「委員会の論理」を書いたといえる。そしてこの矛盾する両極にシュパンヌング的に引き裂かれつつ、その中間に位置し続けることこそ、人民戦線を維持し続ける原理であり、戦後、中井の親友、新村によってその立場は実践されていたといえる。したがってこのことは、よりメデイウムので書物の広告の多い『世界文化』を意識しつつ中井は、よりミッテル的で喫茶店の広告の多い『土曜日』に普段執筆していたということが出来る。したがってその点では《メデイウムに支えられたミッテル》を志向していたとみることが出来る。さらに《メデイウムに支えられたミッテル》とシュパンヌングの関係もここから理解できる。

中村雄二郎は『共通感覚論』(1979)において、中井、三木清、戸坂潤、三枝博音の共通感覚論の試みは、国際的にみても画期的なことであり、西田幾多郎の「場所」の理論を発展的に乗り越える方向性を示唆しているとさえ評価していた。西田は国際的に注目され続ける数少ない日本の哲学者である。西田とのつながりはまだしっかりと描けないが、オルテガが懸念し、戸坂や中井が取り上げたように、文化が専門分化することで人々がある側面では専門家、知識人でありつつ、別の面では愚衆である状況が1930年代にはあったし、中井は「蓄音器の針」(1933)にてその状況を瀧川事件の遠因とさえしたが、それから80年経た今日、この状況は改善されないどころか益々深刻化している。このようななか教養主義が崩壊し、共通の教養が消え人間の全体像が描けない時代こそ、異質な他者になり切り、その視点を学ぶ、ミッテルの媒介が必要となる。しかしそのミッテルは、既存のあるいは自分の固定観念的な理論の否定ではあっても、断片、素材に留まっては全体像の回復にはならない。自分の視点を全否定しつつ、最終的には自分の視点と他者の視点を総合、止揚する必要がある。そういった意味での《メデイウムに支えられたミッテル》の実践の姿を理解することは、国際的

にも現代的にも意義深いことといえる。

最後に今後の課題について記す。定量分析も手作業で行いコーダーの主観によって変わりうる項目があったため、再現性の向上のための、項目の見直しを図る必要がある。さらに中井のものと推定される無署名の文章をいくつか発見したが、推定はまだ読み手である研究者の主観による部分がある。安形輝が開発した著者推定のプログラム等を援用して、より客観性のある推定を行い、中井の著述目録を増やし、さらに彼以外の同人の著者推定も進めていくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件中1件)

後藤嘉宏、中林幸子、戸邊俊哉「中井正一の「委員会の論理」(1936)と三木清の関係 印刷メディアにおけるコミュニケーションの双方向性の復活の可能性への言及に着目して」『比較思想・文化研究』4. 1-32 (2012), 査読無し

〔学会発表〕(計19件中0件)

〔図書〕(計7件中2件)

後藤嘉宏ほか『講座東アジアの知識人4 戦争と向き合って』有志社 400p(141-162)2014年

安光裕子ほか『やまぐちの文学者たち 増補版』やまぐち文学回廊構想推進協議会 161p(78-79)2013年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 嘉宏 (GOTO YOSHIHIRO)
筑波大学・図書館情報メディア系・教授
研究者番号：50272208

(2) 研究分担者

安光 裕子 (YASUMITSU HIROKO)
山口県立大学・国際文化学部・教授
研究者番号：70128792

中林幸子 (NAKABAYASHI YUKIKO)
四国大学・文学部・講師
研究者番号：70610442

白井 亨 (SHIRAI TORU)
京都大学・経済学研究科・助教
研究者番号：30293856

岡部 晋典 (OKABE YUKINORI)
同志社大学・学習支援・教育開発センター・助教
研究者番号：60584555